

## ヴェーユ身体論〔補Ⅲ〕

村上吉男

さすればヴェーユが〈歓喜のなかに必然性を感じる〉と表現した真意をどう理解できるかであろう。筆者がこの語句は彼女の体験から獲得された思想に基づき発せられたというならば、体験をして彼女の〈自然的な魂 (l'âme)〉を〈超自然的な魂 (l'âme)〉に〈移行〉せしめたにせよ、そこは「非空間、非時間、非物質 (非質料)」の〈領域〉である以上、何もない、何の思想すらないといえるところなのだから、かの〈次元〉の体験 (思想) を語るに、当然〈自然的な魂〉中の〈精神 (un esprit)〉にかかわる〈理性 (知性)〉での、このような言葉に従わせた語句で表記する以外に表現し切れなかったと察知できよう。そこで彼女はこの語句にて何を主張したかったのか見極めなければならない。それは筆者が察するに、〈感じる〉を中心にした捉え方にある。すなわち〈感じる〉はそれ自体を一能力と、ましてや〈能動〉能力とみるのではなしに、〈受容、同意、愛 (エロース)〉を一体として含意させ、これをして人間内部 (〈超自然的な魂〉) に生じさせられる〈必然性〉たらしめると。換言すると〈受容、同意、愛 (エロース)〉は〈超自然的な魂〉にあって、〈受動〉や〈能動〉の区別を要しない〈感じる〉であり、〈感じる〉は人間自らの〈自然的な魂 (l'âme)〉のかの諸能力をば〈超自然的な魂 (l'âme)〉での〈受容、同意、愛 (エロース)〉にかかわらせる〈必然性〉の役割を担っていると。

La subordination consentie de toutes les facultés naturelles de l'âme a l'amour surnaturel est la foi.<sup>(1)</sup>

超自然的愛のための、魂の自然的諸能力によって同意された服従 (受容) は、信仰である。(括弧内は筆者)

C'est que Dieu est Amour. Le Fils est séparé du Père pour témoigner qu'ils s'aiment. Témoigner devant qui? Devant eux-mêmes. Dieu témoigne devant Dieu qu'il aime Dieu.<sup>(2)</sup>

それは神が愛であるということである。子は父と子が愛し合うことを証するために、父から隔てられる。誰に証しするのか。父や子自身に対してである。神は神が神を愛することを神に対して証しする。

最初の引用文中の〈超自然的愛〉は二番目のそのの〈神が神を愛する〉に相当し、〈神〉同士による〈愛 (エロース)〉以外の意味ではあり得なくなる。だが二番目の引用文にてさらに、〈神 (父)〉は〈神 (子)〉との〈愛 (エロース)〉を〈証するために〉、〈神 (父)〉

の住まう「あの世界（超自然的な領域）」と〈隔て〉させる〈放棄の業（acte）〉<sup>(3)</sup>によって、〈神（子）〉を遣わし住まわせる〈この世界（自然的な領域）〉を〈創造〉したとみえるがゆえに、たとえば〈神（子）〉たるキリストの受難のごとき〈不幸〉が〈この世界〉に蔓延しては、〈不幸〉をして〈子〉を、したがって〈この世界〉を〈痛ましく愛されている〉といわしめる〈必然性〉の一にしかかかわらせはしなかった。むろんヴェーユが他方で〈神が愛である〉と記した〈愛〉は、一に、〈この世界〉は〈神（父）〉による〈放棄〉で成ったために、〈痛ましく愛されている〉ほかない、〈神（父）〉の〈愛（アガペー）〉であること、要はこの〈愛（アガペー）〉こそ、〈子〉が〈父から隔てられ〉た〈必然性〉の〈証し〉になることを、一に、〈父や子自身に対して〉〈証しする〉は〈子〉の〈父〉への〈愛（エロース）〉であることを含み得る。〈子（キリスト）〉が前記したごとく、〈どうしてわたしをお見捨てになったか〉と〈わが神（papa）〉に向けて叫んでいたことさえ、〈子（キリスト）〉の〈不幸〉とみるならば、この〈不幸〉の「叫び」は、なるほど〈神（父）〉と〈隔てられ〉たがゆえの、〈痛ましく愛されている〉〈愛（アガペー）〉すなわち〈必然性〉を因にするとはいえ、筆者にとっては、〈子（キリスト）〉が〈父〉に決して〈見捨て〉られないと信じ切る〈愛する〉〈愛（エロース）〉の反語的表現であると、あるいはこの〈愛する〉〈エロース〉は後記する、彼女が体験した〈必然性を感じる〉という〈感じる（sentir）〉の意に等しくなると捉えられるのだから、〈エロース〉をも〈アガペー（必然性）〉下に生じた〈必然性〉に組み入れさせるにちがいない。なぜなら〈神（父）は神（子）が神（父）を愛することを神（子）に対して証しする〉からである。要は〈神（子）〉の、あの「叫び」なしに、つまり〈子（キリスト）〉の、〈アガペー〉への〈服従（受容）〉や〈同意〉なくして、〈神（子）〉は「叫び」を、すなわち〈神（父）を愛する〉ことを不可能にされたのだし、〈神（父）〉は〈受容、同意、愛（エロース）〉が〈神（子）〉にあって、「必ずそうならねばならぬ〈必然性〉であることを〈神（子）〉にいい聞かせていたといえるからである。〈神（子）〉は自らの、または〈この世界〉の〈不幸（必然性）〉を〈受容〉し、それに〈同意〉せず、〈神（父）〉を〈愛する〉〈エロース（必然性）〉が可能にならないばかりか、この〈エロース（必然性）〉によって、〈神（子）〉自らの存在を〈神（父）〉に返すことさえできなくなる。ここにおいて、〈神が愛である〉とは、〈愛〉が〈アガペー〉であれ、〈エロース〉であれ、〈必然性〉を含意させるからして、〈神〉は〈必然性〉であると、また〈この世界〉が〈神（子）〉や、まして人間ですら、〈愛（アガペー）〉に服さずにいられない〈必然性〉にあるからして、いかんともしがたい、この〈必然性〉を、要は〈神（父）〉が〈放棄の業（運動）〉による、〈この世界〉の〈創造〉を、さらに彼女の理解する〈神（子）〉キリストが〈受容（同意）〉する、自己〈放棄の運動〉なる〈逆創造〉を〈現実〉にしても、なおも〈神（子）〉が〈神（父）を愛する〉ことができたのに見倣い、人間は人間自らの存在を〈神（父）〉に返すよう〈愛〉すべきであるといわなくてはなるまい。人間の〈逆創造〉や〈愛（エロース）〉にも、人間が〈自然的な魂〉の諸能力（感受性と感情）を、かの各〈激し〉い〈運動〉のもとで〈移行〉した〈超自然的な魂〉に〈受容、同意〉させ得る〈必然性〉を欠かせてはならないというわけである。

人間をして〈神を愛する〉ことを追い求めさせ、〈超自然的な魂〉に誘わしめるのを称する、〈逆創造〉について、筆者が再度取り上げるは、〈逆創造〉がいかに成ったかなどを、これまで掲げた諸引用文のいくつかから明らかにさせたいためである。そのいくつかのう

ち、「最初の」と記した引用文にあって、〈信仰〉が他の引用文中の、〈祈りは注意力から生み出される〉と書かれた〈祈り〉に換言されるならば、この〈信仰（祈り）〉に対する主語〈（超自然的な）魂（l'âme）の自然的諸能力によって同意された服従（受容）は〉とされたなかの〈自然的諸能力〉の一は当然、〈祈り〉ではじまる上記引用文中の〈注意力（知的注意力）〉でなければならないし、〈（知的）注意力〉に関しては、また他の引用文に、〈わたしたちが知的注意力に、受容、同意、愛である、さらに高次の注意力を加えるとき〉と語られたのがみられるのだから、疾うに一見した通り、〈知的注意力〉と〈高次の注意力〉という、〈存在しないものに現実に関心することにある〉<sup>(4)</sup>〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉とがまさに繋がる（結びつく）関係を有することを知るのだ。〈直観的注意力〉が〈存在しないもの〉すなわち〈神〉また〈善〉に〈方向づけ〉る〈超自然的な能力〉<sup>(5)</sup>であることは〈創造的注意力〉に同様となる。〈超自然的な魂〉に〈受容、同意〉された〈知的注意力〉が各いう〈注意力〉のいずれかになるにあって、この相違は〈創造的〉や〈直観的〉の各修飾語自身の意で見分けられるといえども、それぞれにいかなる〈運動〉ももたらされずに、人間には〈存在しないもの（神また善）〉への〈方向づけ〉が〈現実〉にならないのは確かであった。だが筆者にさらにいえるは、〈存在しないもの〉が「あの世界」たる〈超自然的な領域（魂）〉における〈神〉また〈善〉だけではなく、〈この世界〉たる〈自然的な領域（魂）〉にもみられることである。人間が〈この世界〉に生まれてしばらくは、およそ誰の目の前にも〈存在しないもの〉の方が圧倒的に多くあったはずであり、この〈存在しないもの〉をいまだ体験していない〈もの〉に想定して受け取るならば、〈存在しないもの〉、たとえば〈不幸〉と人間自らの〈運動〉とが重ね合わせられる（一体となる）ことなしに、人間は〈超自然的な魂（l'âme）〉としての各〈注意力〉を生み出し得なかったであろうと読む。こうして、ある人間が〈存在しないもの〉（未体験であった）と知る、その一たる〈不幸〉に実際出会うとき、〈不幸〉は〈この世界〉や他人からくる〈もの〉を含めていう「他者」の〈不幸〉か、ある人間自身の〈不幸〉になるかのいずれかを示そう。そこで前述した語句〈存在しないものに現実に関心すること〉を筆者なりにまとめおくと、〈現実に関心すること〉は、〈現実（réellement）〉の語意から、今「実際に」〈超自然的な魂〉での〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉を〈存在しないもの（神また善）〉に〈方向づけ〉ていることをさすとみられる一方、それでもそのためには、ある人間にとって〈現実〉に、何も試みずに〈方向づけ〉を可能にできるのではなく、〈自然的な魂〉での〈自然的諸能力〉（ここは上記した、〈高次の注意力〉である各〈注意力〉と「繋がる（結びつく）関係」で捉えられねばならぬからして、〈知的注意力〉が適当しよう）を〈存在しないもの〉、すなわち例の「他者」の〈不幸〉やある人間本人の〈不幸〉に注ぐことなくば（筆者は「他者」の〈不幸〉やある人間本人の〈不幸〉にそれぞれ注がれて生じるのが、〈感受性以上〉（後述）以外では、〈創造的注意力〉と〈直観的注意力〉であり、そこに各〈高次の注意力〉の相違が強いていえば見出されようと指摘しておく）、繰返しいうが、各〈高次の注意力〉なる〈超自然的な能力〉は生まれぬことを、とどのつまり〈超自然的な能力〉は、ある人間（ヴェーユ）が〈この世界〉でのいまだ〈存在しないもの〉たる「他者」の〈不幸〉やある人間（彼女）自身の〈不幸〉を、これらのいずれにも「重なり合う」、本人自らの〈激し〉い〈運動〉を通して生じさせ得る〈自然的諸能力〉でもって、何よりもまず自らに〈受容（同意）〉させずに、「あの世界」での〈存在しないもの〉たる〈神〉

また〈善〉に到達せしめよう〈超自然的な魂〉はかたちづくられないことを含意させるにあると断じ得る。そして筆者にすれば、ここにきて、〈知的注意力〉の〈高次の注意力〉への「繋がる関係」を目にできたことは、これも疾うに触れた語句〈感受性のさらに高級な部分〉をして〈感受性の感受性以上〉にいい換えさせると指摘したことだけが、そこに「繋がる関係」を有して捉えられるのではないことを知る。「繋がる関係」が窺えることは筆者にあって、「再三記す」とした引用文を、なかでもその語句〈歓喜のなかに必然性を感じる〉を例にしてさえ読み取れることである。次の段落から、上記のことに以下をも含めたことの証明を試みるが、要は〈超自然的な魂〉における〈存在しないもの（神また善）〉に〈方向づけ〉るは、すなわち〈神への愛（エロース）〉はもはや〈感受性の感受性以上〉だけではなしに、上記した〈知的注意力〉の〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉によって、先きの語句中の〈歓喜〉の〈純粋な歓喜〉によって、さらに〈願望〉の〈純粋な願望〉によっても〈現実〉になるということである。

ここで「再三記す」とした引用文〈歓喜のなかに必然性を感じるができるのは、感受性のさらに高級な部分であり、それはただ美の感情の仲立ちによってのみ感じられ得る〉をまた取り上げるは、この全文の、筆者なりの解釈を以下に示さねばならぬはむろんのこと、さらに全文には筆者のこれまで述べてきた主張が肯定的に語られているとみえるからして、ときに必要あらば「筆者なりの解釈」を加えながら、その「主張」を先きに証明したいがためである。それはもとより、筆者にいう、認識論的思想の「主張」にある。その「主張」は上記引用文に基づくともいえるからである。ヴェーユに察知されよう「認識論」で肝心なことは全文から、あるいは一見していたことで分かる通り、たんに〈この世界〉の人間（彼女）による、〈自然的な魂〉での、たとえば上記の〈歓喜〉〈感受性〉や〈美の感情〉という「知る作用」（「認識（論）」）にとどまるだけではなく、「あの世界」の同じ人間（彼女）による、〈超自然的な魂〉での、たとえば上記の〈感じる〉という「認識（論）」（〈超自然的な魂〉に「認識論」が想定されていればの話だが）をも織り込ませて成るとみなければならないことである。彼女にみられる「認識論」は〈自然的な魂〉と〈超自然的な魂〉との諸能力を一つに「繋がる」（結びつかせ）て捉える必要がある。〈超自然〉〈超自然的な領域〉と〈超自然的な魂〉の各語は彼女に用いられるほか、よく宗教（正統キリスト教）においても使われる。このことからか、人は彼女に宗教思想家の相貌を付してこと足りたとする。そうなのか。筆者には否であった。その根拠はここにある。すなわち、彼女の説く「認識論」は〈自然的諸能力〉のみか、〈超自然的（諸）能力〉までを取り入れたそれになるといわねばならぬのであって、ことさらに〈超自然的な魂〉を持ち出して、〈超自然的な魂〉に関する「認識論」を、彼女の宗教（の認識論的）思想に扱い、これのみに閉じ込めたり、また彼女独自の哲学の土台とみる「認識論」から切り離したりさせられてはならないと。なぜなら彼女独自の哲学は、ここで「独自の」といわせるに、〈超自然的（諸）能力〉を盛り込む、その「認識論」がみられるからであり、何より彼女の生き方そのものであったと断じ得るからである。

こうした「認識論」が成ったのはヴェーユにあって、〈自然的能力〉が〈超自然的能力〉へいわば発展（展開）するのではないかと問いかけ得たことにあるとみる。彼女は〈神〉の存在が彼女をはじめとした〈わたしたち〉の、いかなる「知る作用（認識）」によって明かされ得るかを探らんとした。このことはだから、前段に記した引用文全文で証明でき

るわけである。またこれは宗教に問われよう「認識論」にかかわるとみられども、〈自然的な魂〉と〈超自然的な魂〉とを「繋がり」させることにより、一貫し、整合する「認識論」に捉えなければならぬからして、彼女独自の哲学に組み入れさせてしかるべきなのである。〈わたしたち〉人間が〈この世界〉に存在していなければ、〈神〉を除くにしろ、誰も〈この世界〉を〈創造〉することはできなかつたであろう。誰も〈神の愛（アガペー）〉なる、〈この世界〉の〈必然性〉のことも、まして〈神への愛（エロース）〉のことすら質せはしなかつたであろう。しかし〈神自身に向かう愛（エロース）〉を〈現実に〉するは、〈この世界〉の〈愛（アガペー）〉である〈神（子）〉キリストが、もとは〈神自身〉の〈創造〉した〈愛（アガペー）〉を〈受容〉する、かの「叫び」からしかはじまりはしないのだから、〈神（父）〉は〈愛（アガペー）〉なる〈必然性〉により、キリストを〈逆創造〉に導かせ、〈この世界〉のだけか、「あの世界」の〈すべてを統轄する〉、それこそ〈必然性〉を支えに支えていたとみてかまわぬのであり、彼女が〈わたしたち〉人間をして、今度は〈存在しない〉という、自分たち自身の存在を否定させることを課すは、〈神（父）〉の〈愛（アガペー）〉なる〈必然性〉が〈神（子）〉に背負わされ、〈神（子）〉による〈神に向かう愛（エロース）〉になる、すなわち〈神（子）が神（父）を愛（エロース）する〉ように、たとえば〈この世界〉たる〈必然性〉の一である〈不幸〉を、要は〈痛ましく愛されている〉〈愛（アガペー）〉を受け入れ（受容し）ないわけにゆかなくなるからである。〈痛ましく愛されている〉〈愛（アガペー）〉の〈受容（同意）〉が〈わたしたちを貫いて、神自身に向かう愛〉であると彼女に記されくるではないか。しかり、〈必然性（不幸）〉が〈わたしたちを貫く〉かねば、〈受容（同意）〉にならないし、〈愛〉なる〈必然性〉は〈神自身〉の〈業（運動）〉でもあるのだから、〈わたしたち〉は〈神〉に出会えるに、つまり自分たちの存在を〈神〉に返すに、なるほど〈この世界〉の〈必然性〉を自分たちでは覆し得ぬども、かといってそのままに捨ておくのではなく、彼女のみるキリストに倣い、この〈愛（アガペー）〉で〈わたしたちを貫く〉き得る〈運動〉でもって、換言するとその〈必然性〉を〈受容〉し、それに〈同意〉できる〈運動〉をもって、筆者にすれば〈受容〉〈同意〉に等しく捉えられる、〈神自身に向かう愛（エロース）〉を可能にさせるのだ。こうして〈わたしたち〉も〈逆創造〉できることになる。彼女は〈逆創造〉を〈わたしたち〉人間の〈必然性〉ですらあると解していた。だが彼女が何ゆえ、〈神〉のこゝろを持ち出し、〈わたしたち〉人間を〈神〉とかかわらせるかは、彼女が〈神〉は〈純粹な、完全な、すべてを統轄する、絶対的な善〉であり、〈絶対的な善〉についての約束ごとは神によってのみ認証される〉と断じるかぎり、〈不幸〉だけか、〈世界の美〉をもたらす〈必然性〉のこゝろをば、〈この世界〉の、〈神〉による〈創造〉にまでゆきつかせずには、その答えは求められ得なかつたからである。

それはともかく、〈必然性〉の語意はすでに触れたように、「必ずそうなること」をさすにあつた。そこで筆者は前記していた引用文全文に対する、「筆者なりの解釈」をようやくここにきて順次試み得るといえるなかで、まずは、〈歓喜のなかに必然性を感じる〉を取り出し、そのまとめと結語を述べるところからはじめることにする。一に、〈必然性〉を上記のごとく換言させ、この語句全体にかかわらせては、〈歓喜のなかに「必ずそうなること」を感じる〉と読み直す。ならば何が「必ずそうなる」かと問う「何が」には〈歓喜〉しか当てはまらないと見通せるのであって、そこからはさらに、〈歓喜は「必ず純粹

な歓喜になること」を感じる」と断じてかまわぬことになろう。〈歓喜〉と〈純粋な歓喜〉とが「繋がる（結びつく）」関係にあったことは疾うにみた通りであるし、のちにも一見する。そこに立つと、筆者はヴェーユがとりわけ注視するであろう、〈自然的な魂〉の〈自然的諸能力〉すなわち〈受動〉能力たる〈感受性〉〈願望〉やこの〈願望に結びつく〉〈知的注意力〉さえ同様に、それぞれはときに（同時ではなく）、「必ずそうなること」をして、「必ず〈感受性以上〉、〈純粋な願望〉、〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉になること」を感じる）ことを含意させずにおかないと指摘することができるのだ。

しかれども、一に、〈歓喜〉の例に代表させて、〈歓喜〉が〈超自然的な領域（魂）〉にあって、〈必ず〈純粋な歓喜〉になること」を感じる〉と換言したうちの〈感じる〉はいかなる正体を有するとみることができようかである。〈感じる〉はその結語を先きに述べおくと、〈受容、同意、愛（エロース）〉までを一応含ませて理解されねばならないということになる。このことを以下に明かすうえで、筆者はまず、〈感じる〉を〈受容、同意、愛〉とみなすにもかかわらず、〈愛〉を除いた、〈感じる〉すなわち〈受容、同意〉各それ自身をば〈超自然的（諸）能力〉といわせないと断っておく。〈超自然的な魂〉で、こうした〈必然性を感じる〉にせよ、そこは「非空間、非時間、非物質（非質料）」的領域（魂）である以上、どうして〈感じる〉が、〈受容、同意〉が、要はそのような呼ばれ方が〈超自然的（諸）能力〉になり得るであろうか。否である。なるほど〈超自然的な魂〉を〈現実に〉したのは誰でもない、ヴェーユであったが、彼女のかかる体験は、そこが「空間、時間、物質」をあらわさない領域であることを前提にすると、少なからず〈感じる〉を字義通りに受け取り得なくなるからである。たとえば、〈超自然的な領域（魂）〉が〈空無（真空）〉という、いわば何もないとみえるところからは、「〈純粋な歓喜〉になること」に対し、何ゆえ〈感じる〉ことができようか、できはしない（〈純粋な歓喜〉が「何もない」領域で疾うに記した〈超自然的な能力〉になると再確認するは後述に譲る）し、そもそもそこが「何もない」領域（魂）がゆえに、この〈歓喜〉が〈純粋な〉の語を付すほかなくなる、換言すると〈純粋な〉しか通用しないのが〈超自然的な領域（魂）〉なのである。それよりかさらに留意せざるを得ない、「〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉（のいずれか）になること」の例に対し、〈感じる〉という語の使用は許されないといわねばなるまい。なぜなら人に〈超自然的な魂〉での〈感じる〉用法が〈自然的な魂〉でのその用法と相違していかまわぬとみなされるならば、何も返答できなくなるが、しかし〈感じる（sentirやressentir）〉は、本来〈感受性〉や〈感情（歓喜と願望など）〉の〈自然的諸能力〉が各もたらされる際に用いられるだけであり、〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉（これらも〈超自然的な能力〉になる）にかかわらせるうえで、同じ〈自然的な魂〉の〈魂（une âme）〉の部位ではなく、〈精神（esprit）〉部位を出所にしよう〈知的注意力〉に対しては効力のない〈能動〉能力であったからである。〈自然的な魂〉中の〈感じる（sentir）〉がこうした語意に従う用法であったのに反し、筆者には〈超自然的な魂〉で語られる〈感じる（sentir）〉は〈受容、同意〉の語意に等しくみえたし、彼女も〈受容、同意〉をそこでの〈受動〉能力とは明言しない（筆者は彼女の諸作品にこの指摘を目にしたことはなかった）以上、〈感じる〉が〈能動〉能力と、〈受容、同意〉が〈受動〉という各〈自然的な能力〉の使い方を〈超自然的な能力〉に充当させることは不可能である。だから〈超自然的な領域（魂）〉に、〈自然的諸能力〉である、この〈感じる（sentir）〉をはじめ、〈（再び）感じる（ressentir）〉、〈望む（désirer）〉

や〈思惟する (penser)〉が〈能動〉能力として機能し、それぞれの〈受容、同意〉をして〈受動〉能力たらしめたり、〈自然的な領域 (魂)〉の用法と同様な、〈能動〉〈受動〉関係での「知る作用 (認識)」がみられたりするとはいえなくなるわけである。しかも〈超自然的な領域 (魂)〉が「非空間、非時間、非物質 (非質料)」的領域であるかぎり、〈感じる〉は〈受容、同意〉だけでなく、〈愛〉をも含ませた、いわば一体の語意を示唆させると捉えおかねばならぬからして、たとえば〈歓喜〉の〈受容、同意〉を〈受動〉能力と、〈神〉への、その〈方向づけ〉たる〈愛〉を〈能動〉能力と区別させたり、〈自然的な領域 (魂)〉での、例の〈能動〉〈受動〉関係を〈受動〉〈能動〉の順にした関係をみるといわせたりすることとかかわらせる必要はないのである。

にもかかわらず、実際〈感じる〉は〈超自然的な魂〉の表記にさえ用いられていた。ならば一に、ヴェーユにいう〈超自然的な魂〉はこの〈感じる〉の使用によって、どのようにみられ得ようかである。その際留意すべきは、彼女が〈自然的な魂 (l'âme)〉や〈超自然的な魂 (l'âme)〉と述べるにしろ、〈魂〉の語を同じ (l'âme) にして使うことにある。ここからは以下のことが筆者に想定される。まず、彼女のいう〈魂 (l'âme)〉は〈超自然的な魂〉を現出させようが、〈超自然的な魂〉は〈自然的な魂〉を出所にし土台にすると、これはだから、デカルトを例にしては、彼にいう〈真理の探求〉での〈精神 (esprit)〉が〈脳〉と〈独立〉する (無関係になる)<sup>(6)</sup>と説き、筆者にこれを〈脳〉の外にあると捉えさせたのに相違すると、次に、〈超自然的な魂〉の現出は、彼女自身の〈脳〉である〈自然的な魂〉の〈激し〉い〈運動〉でもって、〈自然的な魂 (脳)〉を〈空無 (真空)〉のままに〈移行〉せしめて可能になると、そして、〈超自然的な魂〉にあって、何しろ彼女が〈超自然的理性〉<sup>(7)</sup>といわせる語を書き込むほどだから、〈感じる〉はむろんのこと、その〈思惟 (する)〉<sup>(8)</sup>をも加えられた、〈自然的な魂〉の〈自然的諸能力〉が〈超自然的〉と修飾されながらも、そのまま〈超自然的な魂〉に使われていると、かつそこまでいえるならば、〈超自然的な魂〉も〈魂 (une âme)〉と〈精神 (un esprit)〉の各部位で構成されるようにみてかまわぬかということである。

ところが、今まさに問うている〈感じる〉が上記のごとくに肯定されると、要は〈自然的な魂〉で作用しよう〈感じる〉が〈超自然的な魂〉にさえ通用するとなると、同時にヴェーユに「非空間、非時間、非物質 (非質料)」的で〈空無 (真空)〉であるといわせる〈超自然的な魂〉とは矛盾を生じさせはしないのかである。筆者は彼女が〈移行〉の語を使うのを見て取るかぎり、〈脳〉たる〈自然的な魂〉が同じ〈脳〉をかかるとなる〈空無 (真空)〉なる〈超自然的な魂〉にさせることを認める。しかれどもかかる〈空無 (真空)〉なる、「何もない」〈超自然的な魂〉に対し、〈自然的な魂〉にみられる〈感じる〉が同様に働きかける能力であると認めることはできない。そうみずして、筆者はおろか、彼女すら、〈超自然的な魂〉に関した〈受容、同意、愛〉を持ち出す必要がなくなろう。しかもこの〈受容、同意、愛〉を一方でいう〈感じる〉と関係を持たせないことには、〈受容、同意、愛〉が何のために用いられたのか判明されないだけか、筆者にみる「認識論」から浮き上がり、そこに活かされはしなくなるし、〈感じる〉が前記していたように、〈自然的な魂〉と同じ用法に捉えられてしまう。だから〈超自然的な魂〉にあって、〈感じる〉は〈自然的な魂〉での〈能動〉能力としての働きかけやそれに伴う〈受動〉たる能力を生じさせるのではないわけである。〈自然的な魂〉に発する〈歓喜〉を例にいうにしろ、〈歓喜〉が〈超自然

的な魂)の現出(移行)につれて、そこに〈受動〉の意味を持たせた〈受容、同意〉になるか、はたまた〈歓喜〉に〈感じる〉〈能動〉能力が働きかけ、〈受動〉能力たる〈純粋な歓喜〉をもたらすとみるかにはあつては、いかにも〈自然的な魂〉の〈感じる〉用法通りでしかなくなる。だがこの用法を認めたところで、〈歓喜〉がなぜ〈純粋な〉それであるか読めないし、人が〈純粋な歓喜〉を〈受動〉能力だといひ張ることで、例の〈愛〉が、つまり〈神〉への〈方向づけ〉が〈受動〉能力であることになる。そこでこうした「矛盾」をさえ避けるに、筆者は〈超自然的な魂〉の〈感じる〉をして、この〈歓喜〉を〈受動〉や〈受動〉能力ではなく、当の〈歓喜(感情)〉あるいは〈感受性〉の意味で用いる〈受容、同意〉にさせては(なぜかは後述する)、〈受容、同意〉それ自体を〈純粋な歓喜〉要は〈愛(エロース)〉や〈祈り〉たらしめることを含ませ得ると受け取るほかなくなった。これを証明するのが前記引用文であり、その全文を掲げるなかに、以上の語のいくつかを挿入して書き直せば、次のようにならう。〈感じる〉はすなわち、〈超自然的愛(エロース)〉のための、魂の自然的諸能力(の一なる歓喜)によって同意された服従(受容)は、信仰(祈り)(純粋な歓喜)である)ことが含意されていなければならない。この〈愛のため)に欠かせないのは、〈感受性〉また〈感情〉の〈受容、同意〉である。だから〈受容、同意、愛)は「一体」であり、これこそ〈超自然的な魂〉の〈感じる〉の語意である必要がある。繰返しいうが、〈歓喜〉は〈超自然的な魂〉で〈受容、同意〉になり、この〈感情)たる〈受容、同意〉のもとに、〈超自然的愛のため)の〈純粋な歓喜〉に導かれる(〈歓喜(感情)〉つまり〈受容、同意)なしには当然、〈超自然的愛(純粋な歓喜)〉になり得ない)。こうしてはじめて〈愛(純粋な歓喜)〉だけは、〈愛)を彼女に〈超自然的な能力)という語で表現させるかぎり、〈超自然的な能力)と呼んでかまわぬことになる。以上から同様に、〈感受性以上)〈純粋な願望)と(〈願望(感情)〉を「取り込)んで成る)〈創造的注意力)や〈直観的注意力)がそれぞれ〈超自然的な能力)とみなされてしかるべきことになる(また〈純粋な歓喜)や〈純粋な願望)の〈純粋な)の表記に倣い、上記の残りの〈超自然的な能力)を〈純粋な感受性)あるいは〈純粋な注意力)と違って間違いではなからう)。

前段までに語ったいくつかをさらに展開し、証明するためにも、筆者は先きに、ヴェーユが〈超自然的な領域(魂)〉のことを口にしてはそこを、〈空無(真空)〉と、一方で〈感じる)〈受容、同意、愛)などの出所と捉えていたことに対し、たとえば〈自然的な魂)の〈自然的な能力)〈歓喜(感情)〉が何ゆえ〈受容、同意)ならびに〈愛(純粋な歓喜)〉でなければならぬかに答える必要がある。それにはまず、彼女が〈超自然的な起源の善)をこの世界に役立たせること(わたしにあっては知性だ)〕<sup>9)</sup>と述べたことに耳を傾けるべきである。筆者に「何もない」といわせた「あの世界(超自然的な領域)」に〈自然的な魂)が参入(移行)して、ここに記される〈善)に、筆者にすると〈神)に出会うことは、「何もない)領域にもかかわらず、〈善(神)〉が〈超自然的な魂)にみえてくることをさす。これは彼女にとって、いや〈わたしたち)でさえ、その〈善(神)〉を〈この世界に役立たせる)、要は〈善(神)〉との出会いで、これを〈この世界)に知らしめる、さらにいうと〈善(神)〉を〈この世界)の人間に根づかせる、その実現手段は、まずもって〈自然的な魂)の〈自然的な能力)〈知性(理性)〉を活用させるほかなく、〈知性(理性)〉に基づく表現に頼らざるを得ないことを示唆させる。だから「あの世界」で彼女にみえた体験をあらわすうえで、上記した諸語は〈知性(理性)〉に依拠し、この〈思惟する)能力を駆



使させては、自らの体験が体现されるような語として、彼女に選び抜かれもたらされたのだといえるわけである。要するに、〈超自然的な領域（あの世界）〉や〈超自然的な魂〉のことは、これらの語を含め、すべて〈知性（思惟する）〉を働かせたうえで、かの諸語として書き残されたにすぎないということになる。

そこで筆者は〈超自然的な領域（魂）〉における、筆者なりの論述に、ヴェーユの用いた諸語を当てはめて、その結語を見出すことにする。諸語の一の〈空無（真空）〉は〈超自然的な魂〉の〈空無（真空）〉をあらわすし、同時に筆者に「あの世界は何もない」といわせた〈超自然的な領域〉への参入をして、〈超自然的な魂〉を「何もない」「あの世界」にもさせることになる。さらに諸語の一の〈感じる〉は〈自然的な魂〉で使われる〈感じる〉ではなく、〈善（神）〉が〈超自然的な魂〉に、これも筆者に「みえ（てく）る」と記させた語と同じに捉えてかまわぬだけか、〈超自然的な魂〉でいう〈受容、同意、愛〉の諸語に等しいとみることができた。こうした諸語はもとより、彼女が〈自然的な魂〉での〈感情〉を代表させよう、例の〈歓喜〉の体験を通して、〈歓喜〉が〈超自然的な魂〉でどうなったかをあらわすために使用されたといわねばならない。〈自然的な魂〉に生じた、〈歓喜〉の〈激し〉い〈運動〉が〈自然的な魂〉を〈空無（真空）〉にするや否や、〈空無（真空）〉の、要は「非空間、非時間、非物質（非質料）」の〈超自然的な魂〉を現出し、この現出をもって、〈自然的な魂〉の〈超自然的な魂〉への〈移行〉がなされたと、そこで〈空無（真空）〉はそれがゆえに、これも諸語の一に加えられる〈自然的能力〉〈歓喜（感情）〉のままにさせないと、つまり〈超自然的な魂〉は「非物質（非質料）」だからして、〈歓喜（感情）〉を「神経伝達物質」とは、同様に「非空間」だからして、〈歓喜（感情）〉を〈自然的な魂〉での、〈能動〉能力とその〈受動〉能力となるごとく〈運動〉とは捉えさせないと、ただ「非時間」とされることでは、〈歓喜〉は瞬時に〈純粋な歓喜〉にならざるを得ないと繰返しおく。そして彼女は〈超自然的な魂〉にあって、〈歓喜〉を〈純粋な歓喜〉とするに、「神経伝達物質」やかかる〈運動〉に代えて、おそらく瞬間を意味させていうにちがいない〈受容、同意、愛〉なる諸語によって表現していたとみておく必要があるのだ。だから〈純粋な歓喜〉も当然諸語の一にみられることになる。

この〈受容、同意、愛〉については以下の見方が可能であった。それらの語は〈超自然的な魂〉が「あの世界（超自然的な領域）」と一になる〈空無（真空）〉であるゆえに、〈超自然的な魂〉からみて、例の〈歓喜〉がそこに、〈受動〉やその能力とさせる各語のではなく、〈受容、同意、愛〉の意味を示す各語のように、また〈歓喜〉からみて、〈歓喜〉が〈超自然的な魂〉に「入」った（受容した）瞬間、その〈空無（真空）〉に〈同意〉し、瞬時に〈同意〉をして〈純粋な歓喜〉すなわち〈愛〉たらしめられるようにあらわされなければならなかった。換言すると、〈超自然的な魂〉では、〈自然的な魂〉での〈歓喜〉が〈能動〉と〈受動〉との関係でもたらされる〈感情〉能力であるといわせずに、〈受容、同意、愛〉と述べられるは、そこが能力などという言い方の通用しない〈空無（真空）〉のためであるが、それでも彼女が「何もない」領域での〈純粋な歓喜〉を語るに〈受容、同意、愛〉と書くは、こうした諸語によって〈歓喜〉が「必ず純粋な歓喜になる」、自らの体験を表現したかったからにはほかならないということである。すると彼女が〈受容、同意、愛〉を、要は〈純粋な歓喜〉を〈超自然的な能力〉とも記すところから、〈超自然的な能力〉は〈受容、同意、愛〉の各語を〈純粋な歓喜〉の語に一括させた語であると指摘する以外になく

てこよう。だが筆者はこの見方を肯定せずに、〈純粋な歓喜〉すなわち〈超自然的な能力〉の語を〈愛〉の語だけに相応させるべく割り当てた。つまり14歳の彼女が〈真理の王国（超自然的な領域）に入り込める（pénétrer）〉と記していたことは、〈受容、同意、愛〉の諸語にあって、〈受容〉が〈純粋な歓喜〉の〈超自然的な魂〉への〈pénétrer〉でなければならぬし、いわば〈能動〉の〈受容〉でもって、〈同意〉が〈純粋な歓喜〉の〈受容〉を確実に〈超自然的な魂〉の〈空無（真空）〉に「受け入れる」こと（能動）をさすのであれば、〈受容、同意〉は瞬時に、これも〈能動〉であろう〈愛（純粋な歓喜）〉になることを意味させる。しかし〈受容、同意、愛〉の諸語をすべて〈能動〉にみなし、一にまとめて捉えようともし、諸語が各語に区別され、各謂を有するかぎり、たとえば筆者に〈神への愛（エロース）〉たる〈超自然的な能力〉とみえる〈愛〉に反し、〈受容、同意〉はそれら自体この〈愛〉にみられることはなく、したがって〈愛〉のような〈超自然的な能力〉でも〈能動〉でもなくなるのだ。しかれども〈愛〉が〈受容、同意〉とのかかわりなくば、〈神への愛（エロース）〉なる〈方向づけ〉を可能にしないのも確かである。なぜか。〈神〉の領域（真理の王国）下にある〈超自然的な魂〉では、〈受容、同意〉が〈神が神を愛する〉ごとき〈愛（エロース）〉に導かせ結びつかせる以外、〈超自然的な魂〉はこの〈愛〉によって〈恩寵〉に授かることができなくなるからである。だから彼女にとっては、〈受容、同意、愛〉が〈信仰（祈り）〉になろうし、14歳に〈真理の王国〉に入り込めることを確信したことを後日の諸体験（女工、農業労働体験、宗教的諸体験）で現実に行っていたといえるわけである。

〈受容、同意、愛〉はまた、ヴェーユが〈必然性を感じる〉と記すところの、〈必然性〉や〈感じる〉に各語られる中身になると筆者に受け取らせる。〈受容、同意、愛〉が〈必然性〉によって表現され得るは、〈純粋な歓喜〉の例で再度いうと、〈必然性〉とは〈純粋な歓喜が「必ず純粋な歓喜になること」〉であり、「純粋な歓喜になる」には〈純粋な歓喜〉の〈超自然的な魂〉での〈受容、同意、愛〉が欠かせないことを示すからである。彼女にとってこの〈受容、同意、愛〉は〈超自然的な魂〉たる人間内部に生得的にもたらされる謂の〈必然性〉であろうし、かかる人間内部の〈純粋な歓喜〉をこうした〈必然性〉として捉えるのと同様に、人間外部で生じては、〈自然的な魂〉たる人間内部にこれも〈必然性〉としてかかわらせずにいない〈世界的美〉や〈不幸〉も、とどのつまり〈神は愛であり〉〈必然性〉である〈神の愛（アガペー）〉も、さらに〈超自然的な魂〉たる人間内部にあって、〈受容、同意、愛〉各自体を可能にしよう〈必然性〉でなければならなかったのだ。しかるに筆者の主張では、これらの諸語のうち、〈愛〉が〈感じる（sentir）〉にふさわしくなるだけであった。〈感じる〉はたとえば〈純粋な歓喜〉が〈超自然的な魂〉で「純粋な歓喜になる」において、〈受容、同意、愛〉という〈能動〉の意を示唆させるのと同じにみえるにしても、〈純粋な歓喜〉が〈受容、同意〉するのみでは、〈純粋な歓喜〉にはなれない。「純粋な歓喜になる」は〈愛（エロース）〉に伴なわれる〈純粋な歓喜〉でなければならぬ。これこそ〈純粋な歓喜〉が〈愛〉であり、〈超自然的な能力〉になるといったゆえんである。だから同時に、〈感じる〉もこの〈愛〉をさす必要があるわけである。つまり〈超自然的な魂〉での〈感じる〉は〈神が神を愛する〉〈必然性〉を〈純粋な歓喜（愛）〉でもって〈愛（エロース）〉することに等しくなる。ここから〈必然性を感じる〉とは究極するところ、〈神〉を〈感じる〉ことに、すなわち〈神〉を〈愛（エロース）〉する（〈神〉に〈方向づけ〉る）ことにいい換えられる。〈感じる〉が〈愛〉することと同義であるならば、〈感じる〉はそれ自身〈受容、同意〉の各語の謂

でなくなろうし、〈超自然的な魂〉では、諸語の一である、例の〈純粹な歡喜〉さえもはや〈感情〉能力とみずに、〈超自然的な能力〉というしかないにちがいない。だが〈自然的な魂〉で用いられたと同じ〈感じる (sentir)〉が何ゆえ、〈超自然的な魂〉の〈超自然的な能力〉となって捉えられるといい得るのか。ここでは〈感じる (愛する)〉が〈超自然的な魂〉の〈超自然的な能力〉であるは、彼女が〈必然性を感じる〉に続けて書く〈高級な部分〉の語に対応させねばならぬからだとするにとどめおく（これを後述して確かめるは、また「ここでは」以下に括弧して記した語もすべて〈自然的な魂〉中の能力〈理性 (知性)〉の働きで表現される諸語に含まれるはもとよりのことである）。

それよりか、筆者が今確かめねばならぬは、〈超自然的な魂〉に唯一適當するのが〈感じる (愛する)〉であり、ヴェーユがたとえ〈超自然的理性〉の語を記していたとて、この〈思惟する〉〈理性 (知性)〉であり得ない、換言すると〈必然性 (神)〉に対するは〈必然性 (神)〉を〈感じる (愛する)〉ことであって、〈必然性 (神)〉を〈思惟する〉〈理性 (知性)〉の行使にあるのではないということである。

Il y a des vérités qui sont à sa portée, saisissables pour elle (l'intelligence), mais qu'elle (l'intelligence) ne peut saisir qu'après avoir passé en silence à travers l'Inintelligible. (括弧内は筆者)<sup>(10)</sup>

知性にとっては、その届く範囲にあり、理解できる (ところの)、だが (しかして) 理解できない世界を沈黙のうちに通り抜けたあとにだけ理解できる (ところの)、いくつかの真理がある。(括弧内は筆者)

上記引用文において、〈知性 (理性)〉が〈理解できない世界 (l'Inintelligible)〉とは筆者にいう「あの世界 (超自然的な領域 (魂))」でなければならぬはもはや説明するまでもなかろう。なぜならヴェーユが一方で、〈知性 (理性)〉の〈届く範囲〉という〈この世界 (自然的な領域 (魂))〉のことに言及しており、〈この世界〉で〈理解できる〉とさせる能力は〈知性 (理性)〉にかぎられると断じるからである。さらに「あの世界」は〈空無 (真空)〉であったために、そこを〈沈黙のうちに通り抜け〉ることを課せられては、要はおよそ〈思惟する〉こともなしに無言のままに、または音も立てずに〈通り抜け〉ては、「あの世界」の〈真理〉すなわち〈神 (善)〉を〈この世界〉に打ち出すよう構想するは〈思惟する〉〈知性 (理性)〉の役割であったし、これについてはすでに一見した通りである。〈知性 (理性)〉は彼女をして、彼女をはじめとした人間が〈この世界〉のことを〈思惟〉し〈理解できる〉とさせるはむろんのこと、「あの世界」のことも彼女自らにだけでなく、万人に知らしめる手段として役立つといわせたのだ。とはいえ〈自然的な魂〉が「あの世界」に〈入〉ったといえるにせよ、そこでは〈知性 (理性)〉は有効ではないと、〈知性 (理性)〉が機能し得るは〈この世界〉にあってのこととしかないと確認しておかねばなるまい。それと、彼女が〈わたしたちはわたしたちのうちにない善を、どんな意志の努力を試みよう、手に入れることができない〉と述べたなかの〈意志〉も〈超自然的な領域 (魂)〉では行使不可能なことは、〈知性 (理性)〉と同様であるという必要がある。

そして〈感じる (愛する)〉は以下の引用文中の〈衝動 (impulsion)〉によって明かさ

れくるとみることができる。

Je voyais le critérium des actions imposées par la vocation dans une impulsion essentiellement et manifestement différente de celles qui procèdent de la sensibilité ou de la raison, et ne pas suivre une telle impulsion, quand elle surgissait, même si elle ordonnait des impossibilités, me paraissait le plus grand des malheurs<sup>(11)</sup>

使命によって課せられる諸行動の基準は、感受性や理性から生じる諸行動とは本質的に明らかに違った衝動のなかにあつて、こうした衝動があらわれたとき、これに従わないことは、たとえその衝動が不可能なことを命じているにせよ、わたしには諸不幸の最たる不幸であると思われた。

〈使命によって課せられる諸行動の基準は、...衝動のなかにあ〉るとされた〈衝動〉は一般に「瞬時(急)に起こる心の動き」を意味させるとのことだが、ヴェーユではその「心」なる〈自然的な魂〉に生じる諸〈自然的能力(感情)〉をではなく、〈超自然的な魂〉での諸〈超自然的能力〉をさして用いられたと察知し得る。〈瞬間〉とも前記したはこのためであるし、〈使命〉や〈天命〉<sup>(12)</sup>ゆえの〈超自然的能力〉は〈衝動〉でなければならなかったのだ。確かに、この「心の動き」とは〈運動〉や〈行動〉であつて、〈自然的な魂〉に生じる、〈この世界〉や彼女個人からの〈世界的美〉〈不幸〉〈歓喜〉〈願望〉の各〈感情〉が、ならびに各〈感情〉を「取り込む」〈知的注意力〉が各それとして〈運動〉することをあらわす。しかし当の〈超自然的な魂〉の〈感じる〉は〈感受性以上〉を除く〈感情〉とかかる〈知的注意力〉を〈純粋な歓喜〉に、〈純粋な願望〉に、〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉にすべく、各〈受容、同意〉して、〈神(善)〉に〈方向づけ〉るよう〈愛(エロース)〉するほかなくさせる。この〈感じる〉なくば、〈衝動〉は生まれない。その際筆者が、この〈愛(エロース)〉は〈方向づけ〉に終始するため、〈運動〉もせず、音も立てない無言(沈黙)のままに〈神(善)〉をみつめ得る(だから〈恩寵〉として〈わたしたちは善を受け取るしかできない〉)ことを知るとともに、「〈方向づけ〉るよう」と書いたはそこに〈意志〉の意を当てはめんことを示すでもない。彼女は〈超自然的な魂〉に生じる〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉にかかわろう(〈知的〉注意力は...意志にではなく、願望(感情)に)〈結びつく〉と語っていたではないか。したがって〈自然的な魂〉に発する、この(〈知的〉注意力)や〈願望〉をはじめ、〈歓喜〉も〈感受性〉も〈意志〉に、ましてや〈超自然的な魂〉での、前記している諸〈超自然的能力〉も〈意志〉や〈理性(知性)〉に関与したりはしない。要は例の〈歓喜〉を〈感じ〉ては〈純粋な歓喜〉になり得るのだ。さすれば以上から筆者が〈超自然的な魂〉にも、それ用の「知る作用(認識(論))」があるといえるならば、これは〈超自然的〉〈理性(知性)〉や〈意志〉を除いた、〈感受性以上〉〈純粋な歓喜〉〈純粋な願望〉と〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉なる各〈超自然的能力〉だけで成り立つにちがいなかろうと、しかも〈超自然的な領域(魂)〉でいう「知る作用(認識(論))」はその機序や順序を有せず、たんにかかる〈超自然的能力〉のいずれかがこれをもたらす〈自然的な魂〉の〈感受性〉、諸〈感情〉や〈知的注意力〉の各能力に伴われて生み出されるであろうと指摘し得ることにある。だから各生まれくる〈超自然

的能力)にあっては、本来その都度の各「知る作用(認識(論))」がある必要はないと推察される。それに諸〈超自然的な能力〉が宗教的匂いの漂う語に見立てられども、〈自然的な魂〉でいう「知る作用(認識(論))」の一一に組み入れられるかぎり、この(「知る作用(認識論)」は〈この世界(自然的な魂)〉のそれに「あの世界(超自然的な魂)」の諸〈超自然的な能力(衝動)〉を個別に結びつけさず(繋がせる)ことができるといわねばならない。諸〈超自然的な能力〉をして彼女を哲学者のではなく、宗教思想家の相貌のそれらに与さすのみでは、「あの世界」のことに関心が向けられ、〈この世界〉のことは無関心にさせられるのである。そこで彼女が両世界や両〈魂〉に関し、その両能力をいわば一堂に会した「知る作用(認識論)」を打ち立てたとみえることでは、それが筆者に完全ではなくとも、形成され得たように、このすべてを〈思惟する〉〈理性(知性)〉に借りて〈わたしたち〉に伝えたことが明かされるだけか、「知る作用(認識論)」は彼女の生き方そのもので成り立っていたと読まねばならない。

しからばヴェーユに〈使命〉と捉えさせる〈衝動〉の〈諸行動とは本質的に明らかに違った〉とされる〈感受性と理性〉についてはどうか。〈感受性と理性〉も〈自然的な魂〉にあって生じる諸能力だからして、筆者は不要な諸能力にはならないと断じると同時に、〈感受性〉という〈行動〉は「動の行動」に、〈理性〉という〈行動〉は「静の行動」に従われるとみなすことができた。それでも〈感受性と理性〉のおおの何かが〈衝動〉に比して〈本質的に明らかに違った〉点となるのか。〈理性〉の方は筆者にいう、〈自然的な魂(l'âme)〉中の〈une âme(魂)〉の部位にではなく、〈un esprit(精神)〉の部位に〈思惟する〉を発し得る能力であるばかりか、〈感受性〉や諸〈感情〉が、また〈願望(感情)〉を〈un esprit〉に「取り込む」、つまり〈思惟する〉働きかけのない〈知的注意力〉が〈l'âme(自然的な魂)〉でも〈l'âme(超自然的な魂)〉でも〈効力〉を有することにかかわるとみえたのに反し、〈理性〉は史上のあらゆる人間にとって、〈この世界〉や「あの世界」のことまでをも〈思惟〉させ、〈判断〉し〈確信〉するうえで、最高の能力だとして祭り上げられてきたが、しかし彼女には〈この世界(自然的な魂)〉にしか通用しない能力にほかならなくなったことが、〈衝動〉と〈本質的に明らかに違った〉点になろう。しかも〈理性(知性)〉は〈自然的な魂〉でたとえば〈知的注意力〉に対し〈思惟〉し得ても、それ自身直観と違い、瞬時に〈思惟〉を生み出せないことにある。また〈(知的)注意力〉が〈魂(l'âme)〉の、自然的な部分と超自然的な部分との交差点(intersection)にある〉という前記した引用文と同様に、〈自然と超自然との交差点(intersection)である、知性<sup>(13)</sup>〉と述べられるから、〈知的注意力〉や〈知性(理性)〉は〈自然的な魂(l'âme)〉中の〈un esprit(大脳皮質)〉の部位で産出される諸能力であり、この部位は〈une âme(筆者にいう視床脳)〉に覆い被さり、〈une âme(視床脳)〉の部位で生じた〈感受性〉や諸〈感情〉が伝達されては、ときに〈思惟〉を〈逃亡〉させ〈空無(真空)〉になるところであったのである。

他方〈感受性〉が諸〈衝動(超自然的な能力)〉と〈本質的に明らかに違った〉点とは、〈感受性〉がそのまま諸〈感情〉に変わるのでなく、諸〈感情〉を生み出す、いわば原動力に位置づけられる〈自然的な能力〉であることにある。つまり、〈自然的な魂(l'âme)〉中の〈une âme(視床脳)〉の〈感受性〉に対して、〈une âme〉の〈能動〉能力〈(再び)感じる(ressentir)〉が働きかけては、〈不幸〉〈歓喜〉や〈願望〉なる諸〈感情〉要は〈自然的諸(受動)能力〉をもたらずとみたようにだ。また〈une âme〉で〈感受性〉が成る

にあつては、〈身体〉から伝達された、いわゆる〈身体的感受性〉に、〈une âme〉の〈能動〉能力〈感じる (sentir)〉が働きかけることが〈une âme〉としての〈感受性〉を生じさせることであり、この点でも〈感受性〉は〈(再び)感じる〉ことで生み出される諸〈感情〉の場合と異なるし、諸〈感情〉が諸〈衝動(超自然的な能力)〉になる際の直接因ではない。そして〈感情〉能力ではあり得ない〈感受性〉自体が、あるいは諸〈感情〉自体がヴェェーユに、〈感受性のさらに高級な部分〉といわせた〈高級な部分〉に、そのうえ当の〈感受性〉がだけでなしに、諸〈感情〉も上記語句〈感受性の〉に間接にかかわらざるを得なくなる。要するに、〈自然的な魂〉の〈自然的な能力〉たる〈感受性〉を基点にして、当の〈感受性〉や、〈感受性〉から生じた諸〈感情〉の各〈激し〉い〈運動〉によって、〈自然的な魂〉の〈破壊〉がその度に作り出されるなかで、〈感受性〉が〈感受性以上〉に、諸〈感情〉の例の〈歓喜〉や〈願望〉がそれぞれ〈純粋な歓喜〉や〈純粋な願望〉になったがゆえに、〈自然的な魂〉は〈超自然的な魂〉に〈移行〉させられたとみることができる。しかも〈感受性以上〉〈純粋な歓喜〉と〈純粋な願望〉が各〈超自然的な能力〉であったことから、〈高級な部分〉とはもはや〈超自然的な魂〉をさすほかなくなるのだ。その際〈高級な部分(超自然的な魂)〉がかの〈歓喜のなかに必然性を感じる(ことができるのは)〉に続く語句であるのを見据えれば、当然〈必然性(「純粋な歓喜になること」)〉は、かつ〈必然性を感じる〉という〈感じる〉は〈高級な部分〉で惹起することに等しく捉えられるにちがいない。だが同時に、〈高級な部分〉は〈空無(真空)〉であつたれば、何ゆえ「何もない」〈超自然的な魂〉に対し、こうした語句表現が可能になろうか。「あの世界」や〈超自然的な魂〉(の超自然的諸能力)のことがだけでなく、〈この世界〉や〈自然的な魂〉(の自然的諸能力)のことがさまざまな語で記されるはもとより、〈自然的な魂〉の〈能動〉能力〈思惟する(penser)〉とその〈受動〉能力〈理性(知性)〉によると断じる以外にない。つまり〈思惟する〉とその〈理性(知性)〉(〈思惟する〉から〈思惟〉を導出する能力)は、〈自然的な魂〉の〈自然的な能力〉を、たとえば〈能動〉能力〈感じる(sentir)〉や〈受動〉能力という名辞に、さらに〈超自然的〉なる形容語を付して〈超自然的な魂〉、〈超自然的な能力〉や〈超自然的理性〉という名辞に変えられる役目を受け持つように用いられている(〈感じる〉については後述で再度検討する)といえる。なお彼女が〈自然的な魂(l'âme)〉の〈超自然的な魂(l'âme)〉への〈移行〉を述べるにあつて、両〈魂〉に同じ〈l'âme〉の語を使用したことは、〈超自然的な魂〉の出所が〈自然的な魂〉にあることを、すなわち〈自然的な魂〉こそ基本であることを意味させども、かく働く〈理性(知性)〉は当然彼女の諸体験をしてその現実を彼女に見極めさせることで可能になるとみる。要は人間(彼女)が〈この世界〉や「あの世界」のことを各表現すべき〈思惟する〉とその〈理性(知性)〉を行使せずに、各世界での人間や事物の事象に名辞を与え語ることができなくなる。このことは筆者にさえ認められてしかるべきである。だから彼女が例の〈思惟と行動〉と記した際の、〈理性(知性)〉を活用せしめ獲得された〈思惟〉の方は上記した役目にあるとて、〈行動〉は何らかの〈思惟〉に依拠し動かされる〈運動〉をさすのではなく、〈身体〉(また〈自然的な魂(l'âme)〉中の〈une âme〉は〈視床脳〉と受け取られると、そこは〈身体〉にみなされる)による〈行動〉を〈この世界〉の人間や事物の事象を明かす〈思惟〉よりか先行させることにあつた。かかる〈身体〉は人間や事物の事象の名辞(名前や言葉)を生み出す〈理性(知性)〉を駆使させる以前から、「生得的」に〈行動(運動)〉しているし、

〈この世界〉のことを名辞に頼らず、〈身体〉自身の〈行動（運動）〉をたえず〈この世界〉に対応させるのだ。そのうえ〈une âme〉や〈un esprit〉で構成される〈自然的な魂（l'âme）〉を除いていう〈身体〉は〈感情〉や〈理性（知性）〉という能力の出所ではない。〈身体〉の〈行動（運動）〉は〈感受性〉にしかかかわらなかった。〈わたしたち〉はこの〈身体〉の〈行動（運動）〉の現実にもっと耳を澄ます必要がある。

だが一方で、確かなことは、〈身体〉の〈行動（運動）〉すなわち「動の行動」をして惹起せしめられる、〈この世界〉や「あの世界」での、かのもろもろの事象をあらわしてくれるは、ヴェーユが筆者にいう認識論的思想に与さず、〈感じる（sentir）〉や〈愛（エロース）〉するなどを例にした、多様な語句（名辞）を持ち出すことで分かるように、〈思惟する〉とその〈理性（知性）〉すなわち〈思惟（「静の行動」）〉に依存するほかないことにある。しかるに、彼女が〈この世界〉でのみ働きかけ得ると断じていた〈知性（理性）〉にとっては、その届く範囲（この世界）にあり、理解できる〉ばかりか、「あの世界」を〈沈黙のうちに通り抜けたあとにだけ（この世界で）理解できる〉と述べたにせよ、まさに今〈この世界〉や「あの世界」に対し「動の行動」の只中にあることと、わけても「あの世界」に対する「動の行動」の〈あとに〉、この〈体験〉を〈知性（理性）〉で〈理解できる（思惟する）〉こととが同じかと問うは、筆者には彼女が両世界での、「動の行動」に発した〈体験〉をその事象に可能なかぎり見合う語句（名辞）で振り返るべく努めていたとみえるにもかかわらず、否定的に答えざるを得なくさせる。なぜなら彼女が〈体験〉を振り返る（書き残す）ことを〈わたしたち〉に伝えることにあると受け止め、〈体験〉の何らかの事象がいかに正確な語句（名辞）に置換されるとみても、それは彼女自らする「動の行動」に等しい表現になるとは断定できぬからである。〈わたしたち〉に共通に流布された語句（名辞）で、たとえば〈corps〉や〈une âme〉を〈身体〉や〈魂〉の各語句（名辞）で明示しようが、「動の行動」（この語句は筆者による）は各語句（名辞）で動くかといえ、そうではなく、また〈身体〉の〈感受性〉や〈魂〉の〈不幸〉と〈歓喜〉という各〈感情〉がそれぞれ〈量〉的「動の行動」として、かつ〈量〉を〈理解できる〉「動の行動」として動くかといえ、そうではないと、要は「動の行動」は各語句（名辞）と無関係に、いわば生物的（動物的）器とその中身（これらの表記も筆者による）を動かすとそれこそ〈理解できる〉のだ。それでも「器」とした〈身体〉や〈魂〉を、「その中味」とした〈感受性〉や諸〈感情〉をこうした語句（名辞）で〈理解できる〉よう作用する〈理性（知性）〉は〈わたしたち〉人間だけに与えられた一能力であるやも知れぬ。その点で、人間は〈理性（知性）〉を活用させなければならなくなる。だが彼女が記す、何らかの語句（名辞）を〈わたしたち〉の〈理性（知性）〉で〈理解できる〉は、彼女や〈わたしたち〉がおのおの、その同じ〈思惟（「静の行動」）〉での〈理解できる〉で導出されたのでないことも事実である。それに〈わたしたち〉が〈理性（知性）〉の駆使に基づくことなしに、彼女のいかなる思想さえ〈理解でき〉ないどころか、かりに〈わたしたち〉が〈理解でき〉たにしても、彼女がした「動の行動」を追体験できぬことも確かである。追体験は当然、〈わたしたち〉の〈理性（知性）〉によって体験されるにあるのではない。また彼女が己れの「動の行動」たる体験を自らの〈理性（知性）〉で追体験を試みようとも不可能になるは上記と同然である。

以上のことは〈この世界〉に生きる、ヴェーユはむろんのこと、〈わたしたち〉人間は〈矛

盾)<sup>14)</sup>を背負う〈生きもの)<sup>15)</sup>でしかないことを示唆させる。〈矛盾〉は前記したとき〈思惟(静の行動)〉と〈行動(動の行動)〉だけでなく、〈この世界〉のすべてに達して見出される現象である。それは〈この世界〉が彼女にいう〈必然性〉にあったからである。〈矛盾〉は彼女に〈必然性〉で〈創造〉され、〈必然性〉に起因するといわせるほかなくなる。〈必然性〉に関する、さらなる言及は後述に譲るにせよ、〈矛盾〉の一例とした〈思惟〉と〈行動〉については、以下のことが想起されねばならない。すなわち、〈思惟(静の行動)〉とは〈自然的な魂(l'âme)〉の〈精神(un esprit)〉たる一部位(筆者にいう「大脳皮質」)で、〈この世界〉から直接〈受容〉される、何らかの対象(一般に語られる〈感覚〉的对象)に対し、あるいはこの部位に「取り込」まれる、〈魂(une âme)〉からの〈願望(感情)〉に対し、〈思惟する(penser)〉働きかけとその〈思惟(pensée)〉の産出を可能にする、〈能動〉と〈受動〉の〈運動〉であり、〈行動(動の行動)〉とは〈自然的な魂(l'âme)〉中の〈魂(une âme)〉たる一部位(筆者にいう視床脳)に〈受容〉される〈身体的感受性(sensibilité)〉に対し、〈感じる(sentir)〉働きかけとその〈(魂の)感受性(sensibilité)〉の産出を可能にする、〈能動〉と〈受動〉の〈運動〉であったし、各〈能動〉と〈受動〉(の〈運動〉)はデカルトにいわせるまでもなく、〈同一のことがら〉<sup>16)</sup>であることにあった。ここから知り得ることは彼女にあって、〈身体的感受性〉の〈魂(une âme)〉への〈受容〉に基づき〈魂〉に生じる〈願望〉が、換言すると〈身体〉の〈行動(動の行動)〉からの〈une âme〉までの、一連の「動の行動」が、〈精神(un esprit)〉に「取り込」まれて〈思惟(静の行動)〉にかかわる以外と、およそ現実にはあり得ない、〈行動〉と〈思惟〉の同時の〈運動〉の場合を除き、〈思惟〉と〈行動〉が各一方より各他方へ相互に〈関係〉することはないのであり、もし〈関係〉させるとなれば、「静」と「動」の各「行動」はその新たな〈矛盾〉に包まれてしまうであろう。だからか、彼女は1934年の論稿『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』で、〈運動する身体の反応はときおり、思惟とは完全に無関係である〉<sup>17)</sup>と記したわけである。これは1930年の学士論文での主張<sup>18)</sup>を踏まえたそれであり、この姿勢は終生変わらなかったと察知される。

ところがである。ヴェーユは上記論稿中に、また1934年時の『一女生徒への手紙』のなかに、それぞれ〈真の自由は...思惟と行動との関係によって定義される〉<sup>19)</sup>や〈わたしは活動を思惟と行動とにおいて理解している〉<sup>20)</sup>と書いて、これらの〈関係〉を肯定する。たとえば、〈精神(esprit)が身体部分に影響を及ぼし、精神が身体に行動を生じさせる〉<sup>21)</sup>というようにだ。だがこの例が〈この世界〉の何らかの対象を〈感覚〉に依存せず、〈精神(esprit)〉が直観的に〈受容〉した〈思惟〉をして〈身体に行動を生じ〉せしめることを示唆させると、〈思惟(静の行動)〉はその〈精神(大脳皮質)〉だけの〈行動(運動)〉にすぎないし、〈精神〉が〈身体〉に〈行動〉の〈命令〉<sup>22)</sup>を与えんとて、〈精神(思惟)〉自体が〈身体〉の〈行動(動の行動)〉に取って代えられるのではない。したがって筆者には〈精神(思惟)が身体に行動を生じさせる〉という〈行動〉を〈身体〉のそれと受け取られはしない。さすれば論稿や手紙に述べられた〈思惟と行動との関係〉は何かとなろう。当時の彼女はかかる〈関係〉をもって、おそらく、〈非人間的にならない〉<sup>23)</sup>ために〈真の自由〉を求めたとともに、〈一女生徒〉には〈真の自由〉をめざすうえで、〈思惟と行動〉が欠かせないと伝えたかったにちがいなさう。しかし筆者はそれのみではないと推察する。この〈真の自由〉に、14歳時にいまだ〈福音書を読んでいなかった〉ときに記される、



〈超越的な王国への接近〉とその〈真理を望んだ〉〈願望〉<sup>24</sup>を重ね合わせると、〈真の自由〉には上記と相違した読みが可能となる。すなわち〈真の自由〉の語句ではじまる引用文は、〈身体的感受性〉が〈自然的な魂 (l'âme)〉の〈魂 (une âme)〉や〈精神 (un esprit)〉に〈関係〉する(繋がる)ことで、彼女に唯一〈心身合一〉が成るといわせよう、その〈行動(動の行動)〉たる〈身体的感受性〉によって、彼女の〈自然的な魂〉が〈超自然的な魂 (l'âme)〉に〈移行〉され、そこで捉え得た〈自由〉を、〈この世界〉のあらゆる人間に分け与えるべくどう実現させるかは、彼女を筆頭にした〈わたしたち〉が〈思惟する〉ことで求められようし、ここにこそ〈真の自由〉が、さらに真の〈思惟と行動との関係〉が見出されることまで含ませ語られていたと、換言すると〈自由〉は「あの世界」に到達できた「動の行動(身体的感受性)」で獲得されるが、こうした〈体験〉を〈理解(思惟)〉する〈理性(知性)〉の行使なしに、〈この世界〉での〈真の自由〉は、〈思惟と行動との関係〉は現実にならないということである。

要するに、「動の行動(身体的感受性)」がまさに〈身体〉から〈自然的な魂〉次いで〈超自然的な魂〉へと繋がる能力であるとなれば、すべての人間にとって必要なのは〈思惟〉よりか、〈行動(動の行動)〉の優先にある。しかもこれは〈この世界〉の〈矛盾〉に対し、〈思惟〉の投入をしてその〈矛盾〉の〈受容〉を拒否させることもできようが、〈行動(動の行動)〉では、かかる〈受容〉を拒否できないことを意味する。人間がこれを拒むにあっては、人間は〈行動(身体的感受性)〉を生み出せないからして、〈身体〉を動かす〈行動(動の行動)〉を否定してはならないわけである。〈身体〉を動かす〈運動〉はおのずと〈身体的感受性〉を生じさせると同時に、人間の〈必然性〉であるとさえいえる。そして筆者にそう読み取らせたは、14歳でのかの主張と、〈精神〉の〈思惟〉の作用よりも、〈身体〉の〈行動〉の方を優位に位置づけさせた感のある学士論文や論稿での主張とが無関係であり得ないことをそれ(およそ1934年12月)以降の、あの工場(女工)体験、正統キリスト教の信仰体験とはいえない、〈神〉との接触たる宗教体験や農業労働体験などの〈行動(動の行動)〉によって、彼女自身に確認させたからである。要はヴェーユが14歳に〈真理の王国〉に入り込めることを確信したことを何よりも〈身体的感受性〉を出発点にする、これらの体験で現実にした、すなわち自らに証明させたということである。

ヴェーユによると、〈自然的な魂〉が「動の行動」で〈超自然的な魂〉に〈移行〉されることは「動の行動」からもたらされる、〈自然的な魂〉の〈歓喜〉〈不幸〉〈願望〉などの諸〈感情〉や〈知的注意力〉を〈失〉わしめ、このそれぞれをたとえば〈純粋な歓喜〉たる〈超自然的な能力〉にするとして、またこうした〈自分の諸感情を失う〉現実は〈この世界〉が〈必然性〉であったことを示唆させると同時に、この〈自然的(諸)能力〉が各〈超自然的な能力〉になるのだから、「あの世界」で生じるすべても「あの世界」の〈必然性〉に従っているとして理解されねばならないといえる。以下に取り上げる引用文が両世界の関係を別の表現であれど、明かしくる。

La lumière surnaturelle dans le domaine de la nature devient lumière naturelle.<sup>25</sup>

自然的な領域(この世界)へと下がる超自然(あの世界)的な光は、自然的な光となる。(括弧内は筆者)

上記引用文に究極的に語られることは、筆者にいう〈超自然的能力〉が「あの世界」で生じる〈わたしたち〉のそれにならなければ、〈この世界（わたしたち）〉の〈自然的能力〉さえないことになるばかりか、〈この世界（自然）〉は「あの世界（超自然）」になり得ないことに、さらに「あの世界」が〈必然性〉でなければ、〈この世界〉も〈必然性〉でなくなることにある。しかし〈超自然的能力〉は「あの世界」の〈必然性〉的能力であるといえても、「あの世界」の〈必然性〉はヴェーユにあって、〈矛盾〉を惹起させない〈必然性〉であることに留意する必要がある。「あの世界」が〈純粋な、完全な、すべてを統轄する、絶対的な善〉の領域であるならば、どうしてその〈必然性〉は〈矛盾〉をもたらし得ようか。かかる領域は〈矛盾〉とは関係のない世界なのである。しからば〈この世界〉の〈必然性〉が〈矛盾〉の因になるとしたはなぜか。〈この世界〉は彼女が〈超自然的な光〉を〈自然的な光〉にするとみなすところにある以上、プラトンにいわゆる《デミウルゴス（工匠）》<sup>26</sup>なる神によって創られたといわせたことに倣うと、要は〈この世界〉が〈痛ましく愛されている〉がゆえに、〈矛盾〉に絶えない〈必然性〉になるとみるほかなくなるからである。

「あの世界」が〈この世界〉と同様に、ヴェーユに〈必然性〉と名付けられた際、その語句（名辞）の語る違いを上記したごとくにあらわしたり、彼女がこの〈必然性〉を背景にかたちづくる認識論的思想を学んだりしている筆者にとって、その表現や学習自体は〈行動（動の行動）〉たる追体験にならないのであれば、せめて彼女が〈思惟（静の行動）〉で〈わたしたち〉に伝えんとして表示した語句（名辞）に拘り、これらをば〈理解できる〉ように取り組むだけが課せられていたのだ。筆者はそこに立って、〈歓喜のなかに必然性を感じる〉ことができるのは、感受性のさらに高級な部分であり、それはただ美の感情の仲立ちによってのみ感じられ得る」という、既出引用文中の、いまだ明かさずにいる語句（名辞）を中心に持ち上げ分析し、この引用文に対する、筆者なりの結語をみておかねばならない。まず、すでに一見した〈必然性を感じる〉と〈高級な部分〉についてまとめおくと、前者の語句が可能であるところは〈高級な部分〉でなければならぬと読み取らせるかぎり、〈必然性〉は〈高級な部分〉なる「あの世界（超自然）」の〈必然性〉であることを明らかにする。「あの世界」も〈必然性〉なのは、「必ずそうなること」の意である〈必然性〉がたとえば〈歓喜〉を〈純粋な歓喜〉にせずにおかないし、〈高級な部分〉をしてこの〈純粋な歓喜〉を〈超自然的能力〉たらしめねばならなかったことで諒解されるからである。〈高級な部分〉はだから、〈純粋な歓喜〉をはじめとした〈感受性以上〉〈純粋な願望〉と〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉という各〈超自然的能力〉が生じよう領域であり、かつ各〈超自然的能力〉は「あの世界」が〈必然性〉であることをあらわす語句ですらあったのだ。そして〈必然性を感じる〉と述べたなかの〈感じる（sentir）〉の語句はどうまとめられるかといえ、これも当然〈超自然的な魂（l'âme）〉である〈高級な部分〉にて〈感じる〉ことになるであろう。しかし〈歓喜〉を例にしていう、〈必然性（純粋な歓喜）〉を〈感じる〉とは何かである。この〈超自然的能力〉を〈高級な部分〉で生じさせるのが〈感じる〉とみなされる際、確かに〈感じる〉は〈自然的な魂（l'âme）〉中の〈魂（une âme）〉の部位で〈能動〉として〈運動〉する〈自然的能力〉の一たる〈感じる（sentir）〉と同じ働きを有してはいるが、それでも〈自然的能力〉と異なった〈超自然的能力〉に見立てられたはずである。しかるに筆者は、一方で〈超自然的能力〉の生じる「あの世界」

すなわち〈超自然的な魂（高級な部分）〉が「何もない」すなわち〈空無（真空）〉とみたからして、その〈感じる〉がそこで〈能動〉や〈超自然的能力〉として〈運動〉するとはいえなくさせるのであり、それよりか、〈自然的な魂〉の〈超自然的な魂〉への〈移行〉の模様をあらわすと受け取らなければならなくなるのだ。要は彼女が〈自然〉と〈超自然〉の両〈魂〉の〈感じる〉能力の各働きに変わりがないと知ったうえでか、〈理性（知性）〉たる〈思惟〉によって〈感じる〉と表現すれど、それだけの意味では、〈感じる〉が〈受容、同意、愛（エロース）〉になることを打ち出せない指摘できるがゆえに、〈感じる〉（という語句（名辞））は〈移行〉の模様を語っていなければならぬのである。筆者のこの主張は次号以降で、具体例をもって検討する。

〔続〕

註

- (1) Simone WEIL 《La connaissance surnaturelle》 (Gallimard) 中の《Cahiers d'Amérique》 P.80
- (2) Ibid., P.201
- (3) 前号「ヴェーユ身体論〔補Ⅱ〕」註(7)
- (4) Simone WEIL 《Attente de Dieu》 (Fayard)中の《Forme de l'amour implicite de Dieu》〈L'attention créatrice consiste à faire réellement attention à ce qui n'existe pas.〉 P.136
- (5) Simone WEIL 《La connaissance surnaturelle》 (Gallimard) 中の《Notes écrites à Londres》〈Faculté surnaturelle〉 P.335（なお〈Faculté〉と〈pouvoir〉の語の相違がみられども、後者による〈pouvoir surnaturel〉は学士論文《Science et perception dans Descartes》(P.61)にある)
- (6) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕」（新潟大学人文学部人文科学研究、第108輯、2002年）P.3 註(12)〈J'ai souvent aussi fait voir fort clairement que l'esprit peut agir indépendamment du cerveau〉
- (7) Simone WEIL《La connaissance surnaturelle》(Gallimard)中の《Cahiers d'Amérique》〈la raison surnaturelle〉 P.56
- (8) Ibid., P.132（そこに〈la pensée du surnaturel〉の語を見出せるから、〈超自然の思惟〉による〈思惟する〉も当然可能になるわけである）
- (9) Ibid., 〈Usage temporel des biens d'origine surnaturelle (chez moi, l'intelligence).〉 P.29
- (10) Simone WEIL 《Lettre à un religieux》 (Gallimard) P.62
- (11) Simone WEIL 《Attente de Dieu》 (Fayard)中の《LETTRE Ⅳ～Autobiographie spirituelle～》 P.38
- (12) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕」（新潟大学言語文化研究、第13号、2008年）P.34 註(14)
- (13) Simone WEIL 《La connaissance surnaturelle》 (Gallimard) 中の《Cahiers d'Amérique》 〈Intelligence, intersection de la nature et du surnaturel〉 P.35
- (14) 拙論「ヴェーユとマルクス②」（同上人文科学研究、第119輯、2006年）註(4)P.P.75-76
- (15) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅰ〕」（同上人文科学研究、第104輯、2000年）

註(1)P.1

- (16) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究、第12号、2007年) 註(13)P.6
- (17) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔I〕」(同上人文科学研究、第121輯、2007年) 註(33)P.58
- (18) 拙論「ヴェーユ身体論」(同上人文科学研究、第120輯、2007年) 註(5)P.30、註(21)P.43 註(29)P.45 (これらの註は註(5)にはじまる一続きの引用文である)
- (19) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔I〕」(同上人文科学研究、第121輯、2007年) 註(3)p.39
- (20) Ibid., 註(5)P.40
- (21) Ibid., 註(27)P.56
- (22) Ibid., 註(33)P.58
- (23) Ibid., 註(4)PP.39-40
- (24) 拙論「ヴェーユと実存主義者たち①」(同上人文科学研究、第123輯、2008年) 註(27) P.P.67-69
- (25) Simone WEIL 《La connaissance surnaturelle》(Gallimard)中の《Cahiers d'Amérique》 P.P.64-65
- (26) 拙著『シモーヌ・ヴェーユ研究』(白馬書房、1980年) P.P.215-217、P.P.219-224など (なお他は「索引」P.5)